

---

# 僕の彼女はあの…

marta

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕の彼女はあの…

### 【Zマーク】

N7659Y

### 【作者名】

marta

### 【あらすじ】

いつも通りの生活を送る少年が美少女を助けたおかげでいろいろな事に巻き込まれ、次第に彼女に惹かれていく…学園ラブストーリー

出会い。

今はいつも通り通学途中。

今日も学校だ。

僕は近頃、携帯小説といわれるモノにはまっている。

友達はバカにするが。  
だから何だ？

彼女居ない歴＝17年＝年齢

ハマるのも仕方ないだろ。

こんな幼馴染がいたらな、とか

運命の出会いとかないかなとか  
を思いながら

近頃過ごしている。

10分後に叶うとは知らずに…

ここは、学校の最寄駅。

いつも通り改札を出て学校へ向かう。  
学校までは5分ほど歩く。

だが、今日はいつもの通学路とは少し違った。

僕が異変に気付いたのは30m先に見た目が「俺ら不良」と叫んで

いる、集団を見つけたからだ。

はあー

絡まれなきゃいいや、と思いつつ素通りする事にした。  
だが、よくみると、  
真ん中にあいつらの友達とは思えない俗に書い美少女と云う女の子の子  
がいた。  
といつよりも、囮まれていた。

「ちよっと、やめてよ。」

「いいじやん、俺たちひまなんだよ」

まあ、僕には関係ない。

こいつらは何をするか知ってるだろ?つか?

スルーだ。

進路の変更はない。学校へ

だが、好奇心といつ欲に負けてチラッと見てしまった。

ヤバイ…目が合った

不良と?  
では…そつ  
美少女と。

目が合つた

と、言うよりも見つめられた。

生まれつき、人の心を読むのに難がある僕であるが、彼女が僕に訴えかけていた事はわかつた。

助けて…だ。

僕にも良心と呼ばれるモノはある。

ここで助けに行く事も出来る。

だが、めんどくさい。

助けたからといってなんのメリットがあるだろうか？

彼女になつてくれる事でもこうのか？

期待するだけ無駄だ。

それに遅刻寸前だ…

しかし、待てよ

今日だけカツコい事もしてみるのはどうか？と、誰かが頭の中でもさやいた。

そうだな。今日だけ。いつか報われる。  
そう信じて…

「おい。兄弟

いくらモテナイからって、

そこまでする事ないっしょ。は他から見て哀れみを感じるよ。」

自分でも

皮肉の才能あるなとつべづべ思つ

「は？何だお前？てか誰？」不良A

「カンケーないのは、学校イキナ」不良B

「ボコられたいの？」不良C

学校行つた方がいいのは  
お前らの方だろ（笑）

「もう一度言つてあげよつか?  
理解できてなせそつだから、  
あ・わ・れ…」

いい終わらないうちに不良Aが殴つてきた。

出たよ、大きく振つてきた。  
顔を横に傾ける。そして、足を掛け投げる。

今度はドロップキックときた。不良C

当たるギリギリまで耐える。

今だ。あのゲームで同じみ「緊急回避」というものをとつた。  
そして、この着地地点には倒れてるAが…

どかつ A 戦闘不能。

友達思いじゃないCを軽く蹴り、

C 戦闘不能。

ふう。あと一人。つて

逃げてるし（笑）ま、いつか。

現在8時27分。ヤバイ遅刻。

バックをとり学校へと方向転換して  
走り出そうとしたとき

「あの〜ありがとうございます」ぺこり。

あつそつか。いたもう一人。

たしかあの子は…

そつか。助けたんだつた…

「本当に、ありがとうございます」

静かに振り返ると、

そこには、茶色のロングヘアで長身のモデルみたいな子が立っていた。

よくみると、

本当にかわいい…

絡まれるわけだ。納得。

「け、怪我はありませんか？」

「特に無いから、

心配しないで。それより急いでるから  
気を付けてね」

「ねえ、お礼したいんですけど…  
メアドだけでも教えて？」

お礼なら、早く行かせてくれ

「あー、本当にゴメン

学校行かなきやいけないんだ」

そして、振り返らず全力で学校へ走りだした。

なぜ聞かなかつたつて？

だって、今日で3日連続遅刻だからさ。  
さすがにまずいだろ…

その日は最悪だった。

生徒指導室に呼ばれ、反省文をたっぷり書かされもつクタクタだ。

明日は、10分早く家出よ。

静かに田覚ましをセッティした。

（～～～）

あー眠い

てか今何時？

8時？まさか。田覚ましかけたはずなのに…

「おい

タケル（田覚まし時計のなえ）

何で起こさなかつた？

あつ、電池切れてた…

（～～～）

ふう、間に合つた。

今は朝日のH.Rだ。  
席に着く。

「みんな着席～知つてるとと思つけど、今日から転校生が来るから。  
佐々木さん入つて。」

へえ、転校生くるんだ…

「おい。転校生つて知つてた？」

「先生、前言つてたじゅん。」

聞いてなかつたの?女子うらじこよ。」

今話かけたのは、前の席に座つてゐ一応親友つて存在の田中。

「あつ、來たよ」

教室の男子からな「ソソソソ」話声が

「やば、かわいくない?」

「マジだ」

彼女はこれから何回告白をされるだらつ…

女子は

「キヤーかわいー」

など叫んでる。

前を見る。

そこには、何処かで見た事ある顔が…

「今日から、ここに入る佐々木結衣さんです。みんな、仲良くなしてあげてね。じゃあ何かひと言。」

「んーと、佐々木結衣です。」

これからよろしくお願ひします」

「「はーい。」」

「じゃあ席は、あそこね。」

「はい。」

やつぱり何処かで見た事ある。

確信は無いが…

えつ、こつちに歩いて来る。

「よこしょつと」

転校生がとなりの席にちょこんと座った。

「これからよろしく。」「

「コッとした微笑みながら言われた。

「あつ、はい。」

そして、口パクで  
「キノウハウアリガトウ」  
と言った。

茶色のロングヘア…  
モデルみたいな脚…  
小さい顔…

ああ――――――――

思い出したあ――

隣に座つた子は昨日の子だつた。  
それから、あの子とは今日話さなかつた。  
彼女が一日中質問責めにあつていたからだ。  
まあ、自分から話かける勇氣もつよりも無いが…

なぜなら、校内では噂の美少女だ。

## 予想外の出来事

ブー、ブー、携帯が鳴る。

「誰だよ？朝っぱらから電話する奴は？」

現在土曜午前11時。大切な休日の朝を非常識極まりない奴によつて起こされた。

眠い。携帯を見てみると、知らない電話番号が表示されてた。

誰？

出るか出ないか迷つたが好奇心から出る事にした。

「はい。もしもし。」

「あつ、出た。もしもしー、起きてる？今日ひま？」

女子の声だ。

「今日は…暇だけど、誰？」

「あつ、そつか。番号知らないんだっけ？」

私よ、私。ほら、金曜日転校して來たでしょ。結衣よ。覚えてないの？」

覚えてるけど、何で番号知ってるの？

「いや、覚えてるけど、何で番号知ってるの？交換しないよね？」

「それは、秘密。」

「じゃあ、1時に立川駅集合ね。」

「ちよつ、ちよつと待つてよ。俺いつ遊ぶって言つた？」

「え、さつき今日ひまつて言つてたじやない。じゃあ、後でね。

ブチ

「切れた…」

今どくなつてるんだ？

大至急で頭を整理する。

ああーーーわやなほむほみめ、や

大変だ。どうする？

行く？いや、わけわからん。

ドタキヤン？それは、最悪。

行くしかないのか…

急いで用意する。

まずは、風呂入って、トイレして、歯を磨い…  
さて、服はどうするか…

ジャケ？いや、そんな気分じゃない。

セーター？違う。

無難にパーカーにしようと。

いろいろ迷った末、思いついたコーディネートを上から紹介しよう。  
シャツの上にプルオーバー。

黒いジーンズを下折り曲げる。

ティンバーランド。

そして、黒ぶちの伊達メガネ。  
どう？悪くないでしょ。

と、鏡に映る自分を勇気づけ家を出る。

現在12時45分前。ちょっと、早く来すぎたかな。  
待ち合わせ場所は確かにここだから、待つてればいいや。  
イヤホンを付けて音楽を聞く。

五分経過…

トントン。誰かに叩かれた。イヤホンを外す。

「た、たくみ君？」

上目遣いで女子に見られてる…

蛇に睨まれたカエル状態だ。

「えっ、あっ、佐々木さん」

「あっ。良かった。何かいつもと雰囲気違うからわからなかつた。」

いつもとつて、一回しか見てないだろ…まあ、いいや

「いやー、よかつたー。」

「何が？」

「いや、だつて、来て…」

最後の言葉がフロードアウトして聞き取れなかつた。

「えつ？ごめん。聞こえなかつた。」

「えつ、来てくれないかと思つたのー何度も聞かないで…」

「あつ。ごめん。」

何で怒られなきや いけないんだよ。

けど、良く見ると私服も可愛い。

赤いセーターがよく似合つてる。

「で、今日はどうしたの？」

「あつ、そうそう。私こつちに引つ越して来たばかりでしょ？だから、この辺案内してもらおつかと思つて。」

「分かつた。けど、何で俺？」

「だつて、前みたいにからまれたら、助けてもらひえのよう」。

そういう事か。なら俺じゃなくて、別の男子に頼めばよかつたのに。

例えば、柔道部の高橋とか？

あいつならどこでもすつ飛んでくると思つし。

「わかつたけど、何で俺？」

別の男子も居たろ？連絡先交換してないの？」

「してないわよ。たくみ君以外。

私、いろいろな男子にホイホイメアド教えるよつな、軽い女じやないわよ。ふふ。」

「わかりました。」

俺も交換しないぞ。思わず言ひそになつた…

「で、どこ行く？買い物？映画？」

「んー、

見たい映画あるんだけど…。」

「わかつた。じゃ、いっか。」

今日は日曜日ともあって人が多いな。

何か、今日は当人比10倍もの視線を感じるのは気のせいだろ？

「着いたよ。」

「あつ。ここか。」

「で、何が見たいんだたつけ？」

「あれ。」

「えつ、あれ？」

「何か不満？」

「えつ、いや、特に何も不満じゃないけど。じゃ、チケット買いに行こう」

別に不満だったわけじゃない。  
ただ、てっきり、

女の子だから恋愛モノを見るものとばかり思ってた。まあ、レース  
俺も好きだし、いいか。

「ねえ、面白かったでしょ？あれ」

「あー、ごめん。寝てた。」

そりや眠いだろ、朝早く起こされたのだから。

「はあ？ 何それ？」

サイテー

「はい。ごめんなさい。」

「まあ、いいわ。ねえ、お腹空かない？」  
確かに空腹だ。何故なら朝食べてないから。  
「じゃ、マックでも行く？」

「うん。」

「いらっしゃいませ〜

何になさいまつて えー？

「匠ちゃん？そして、えー？ も 佐々木さん？」

ヤバイ。

非常にヤバイ。何故ヤバイかって？  
そんな理由一つしかない。

目の前にクラスメイトの鈴木がいるからだ。  
しまった。鈴木がマックでバイトしてる事でつきり忘れてた…

どうしよう。このままだと完璧に誤解される…

「私達、幼なじみなの。」

「ナイスフォローなのか？」

「あつ。そういう事か。

で、注文は？」

良かつた。納得してくれたようだ。  
そういうえば、あいつバカだつたんだ。

「私、ビックマックとマックナゲットとポテト」で。あつ、あとオ  
レンジジュース。たくみ君は？」

「すげーカロリーだぞ？いいのか？」

誰が見ても肥る事くらいわかるぞ？

「えつ、匠と一緒にじゃないの？まあ、いいや。」

鈴木もびっくりしてる。

そりやそうだ。男が頼むならまだしも、目の前で、注文してるのは  
女の子だぞ？しかも華奢で、美人な。

「じゃあ、ダブルチーズバーガーとコーラで。」

「ふう、お腹いっぱい。」

「まあ、そうだろうね。」

さつきから聞きたかった事を聞いて見る事にした。今聞かなきや夜  
気になつて眠れない。

「一つ聞いていい?」「

「なに? 私に答えられることない。」

「いいわよ。」

「いつも、そんなに食べるの?」「

「んー、今日は少ない方よ。何か文句ある?」

「いや、ありません。」

ちゅうと、今田は疲れたな。

そろそろ帰るかな

「じゃあ、帰るか?」「

「そうね、家まで送つてくれる?」「

「はい。わかりました。お嬢様。」「

「ん? 何か言つた?」「

「いえ、何も。」

睨まれた。ていうか、もう上下関係が確立されつつあるのか?  
先が思いやられる…

「へえ、家ここなんだ。結構でかいね。」「

といつよりも、ミニチュアの豪邸?」「

「そうかしら?」「

上がつてく?」「

「遠慮しとおきます。」「

「そう。乗りが悪いわね。」「

「何とでも言つて下さい。」「

「まあ、今日楽しかった

ありがとね。付き合つてくれて。」「

別に、いいよ。暇だつたし。

楽しかつたし。」「

「本当? 良かつた。じゃあ、私と友達になつてくれますか?」「

「もちろん。じゃあね。」

「じやあね

あの子が家に…

ふう、今日も遅刻ギリギリ学校着。  
だが、今日はいつもと雰囲気が違う…  
すれ違う人みんな俺を見て「ソレ」を話している。  
自意識過剰なだけだらうか…  
ならいいけど…

「おはよー」

前に座っている田中に声掛けながら席に着く。

「おはよー、噂の匠くんじゃん。  
おはよー」  
「噂つて…もしかして…」  
「幼なじみなんだってな？ 匠と佐々木さん。」

なんだそれが。ぐると思つてたぜ。

そう思つてシナリオは昨日の夜に考へておいたのさ。

俺つて、できる男（笑）

「そりなんだよ。てか、もしかして校内に広がってる？」

「当たり前だよ。で、いつから？」

幼稚園？ それとも小学校？」

「えーと、確か幼稚園だったかな？」

「へえ、そりなんだ～。で、どうなの？」

「何が？」

「だから、付き合つてるの？」

「はあ？」

まさか、付き合つてねーよ。」

「本当か？」

「あんな美人だぜ？」

「だな」

噂の美人が登場。

向こうにも質問責めにあつてある。

「へえ、結衣ちゃんって匠くんと小学校が一緒だつたんだ～」

ヤバイ。つじつまが合つてない…

明らかに田中も悩んでる。

来るぞー　来るぞー

「なあ、お前わざわざ幼稚園からとか言ってなかつたか？」

キター

「えつ、やうだつたつけ? 向こうは『遊び』にて無いみたいだけど、実は幼稚園からだつたんだ。」

「そういう事か。」

あぶねー。

「おはよー、昨日はありがと。」

「匠くん。ふふ」

「ううひひひ。」

「やっぱ、頼たのむよー仲?」

「ちがーよ」

「ふふ。」

全力で否定。

てか、佐々木さんも微笑んでないで否定してくれ…

昼休み

腹減つた

「おい、田中。昼食べよひぜ?」

「オッケー」

田中が机を動かしていくつづける。

「私も一緒にいい?」

はっ?何言つてんの…佐々木さん

「え、どーぞ どーぞ」

おい、田中やめろ。

確かに男にとつては最高に幸せなひと言だだという事は田中も承知だ。だが、周りの視線というモノを考えて欲しい。

「「いただきまーす。」」

もう、遅かつた…

仕方なく俺も朝買ったコンビニ弁を出す。

「いただきます…」

視線が痛くて美味しく食べれない。

女子 興味  
男子 嫉妬

両方の意味でマズイ…

「匠くんってコンビニ弁なの?..」  
「えつ、ああ  
俺ひとり暮らしだから。」  
「へえ、それでコンビニ弁…  
体に悪いわよ?」  
「知ってる。」

その時俺は見逃さなかつた。  
彼女が何か思いついた顔をしたのを…

「こいつの親、世界を飛び回つてんだ」  
「へえ、そなんだ」

放課後

えあ、帰るか。

「帰らないのか?田中」  
「わりー、今日俺委員会」  
「そつか。」  
「うん。またな」

ひとりで帰るか。

確かに、冷蔵庫の中何も無かつたな。  
買い物していくか。

「ねえ」

「ねえってば」

ん？、俺か？振り返る。

「無視しないでよね」

「悪い。そんなつもりは…」

「ねえ、一緒に帰ろ？」

「誰ど？」

「はい？誰つて、目の前にいる人よ」

「俺？」

「そや。あなた」

「んー、今日買い物していかなきやなんないんだ。」

「うそつ、じゃあ、私の得意分野ね。」

行きましょ」二口ツ

はあ 抵抗しても無駄か…

家

「ねえ、冷蔵庫開けていい？」

「好きに使って」

何で彼女が家に居るかつて？  
言わなくてもわかるだろ？

今日の夕飯は私が作ると言い出したからだ…

こんなところクラスの奴に見られたい…

想像もしたくない。

「『アーリアがいました』」

ちなみに鍋だった。

そして、佐々木さんは料理が上手だった。

「匠くんの家つて筋トレジムみたいね」

「そうか？まあ、トレーニング用品しかないな。」

「ゲームとかしないの？」

「んー、しない。小説は読むよ。ほら。」

本棚を指差した。

「うわあ、結構読むのね。」

「近頃は、携帯小説にハマってるけどね。佐々木さんは本読むのか

？」

「私？たまにね。携帯小説って、運命の出会いとかに憧れてるわけ

？」

図星だ…

「俺の自由だ」「ふーん」「何、にせついてんの？」「別に。今何時？」「んーと、9時前」「もうそんな時間か…じゃあ、帰るねー」

「あつ、駅まで送つてくよ  
「おつ、紳士だね」

「やつぱ、やめた」

「「めーん。」

「はいはい。」

2人で駅まで歩く…

「ねえ、匠くんつて武術とかやつてるの?」

「ひみつ

「ひどーい

「鍋美味しかったよ」

「えつ、ありがとう。どう?お嫁さんこしたい?

「優しい子がいい。」

「じゃあね」

「じゅあ…

いい終わらない内に走つて改札に行つてしまつた…

どうこう意味なんだ。

もしかして…もしかしてか?

やめてくれ—————

それだけはやめてくれ。

うう、胃が痛い…

家帰つて寝よ。

明日にならないで…

## 保健室

ダメだったか…

何がダメだったかって？

今日という日が来るなつて願つてたんだよ。

～昼休み～

ふう…これで四時間目も終了。

さて、そろそろだな…

朝、電車の中で思いついた作戦でも実行しよう フフ（ーー）  
佐々木さんは、と居ない…多分まだ体育館から帰ってきてないんだ  
るひ。

今しかない…

「うう」

「どうした？ 匠？」

と、びっくりした田中。

「な、なんか頭痛が…そして、寒気が…

多分、朝のアイスだ…」

「朝からアイス食ったのか？」

そりや、まずいだろ…

保健室行きなよ。」

「だな、そうする…」

頭を抱えながら保健室へ。

フフ（ーー）

「すみません…風邪引いたみたいなので、ベッドで横になつてもいいですか？」

「あらー、大変ねえ。ゆづくつしてこつて。」

保健室の先生はやつぱ、優しい。

お嫁さんにするなり、こうこうう人じゅなきや…

ここに居れば彼女と昼食を共にするともないし。  
けど、腹減った…

教室でみんなの視線を浴びながら愛妻弁当を食べれるほどい、度胸はない。

てか、彼女じやねーし。

いいや、寝よ…

／＼＼

チリリリーン  
ガシャ。

はあ、眠い。

今日も仕事があ…憂鬱

階段を寝ぼけながら降りて行く。

キッチンのテーブルにはパンと玉焼が…

「あつ、起きたの？たくちゃん  
ごはんできるわよ。」

「おつ、今日も美味しそうだね。

マリは？」

「まだ、寝てるわよ。今日、玉焼しきね。  
「わかったよ。舞。」

ねえ

どこからか声が…

起きてよ

まだ…

バシッ

／＼＼

はつ？何だ夢か…

久しぶりに思い出したな…舞。

「ねえ、起きた？」

田の前には佐々木さんが…

「田中君がたくみくんが熱出したって。あげれる事ある？」

大丈夫？何かし

そうだな…あれしかない。

「苦しい…降りてくれ…」

状況を説明すると、彼女が寝ていてる僕の上に座つているのだ。一応、病気つて設定の人間だぞ。

「あつ、『めんなさい…』

「別にいいよ。でもどうしてここに？」

「さっき言つたじゃない。風邪つてきいたから。あつ、ちよつと待つて……」

「はい。これ。」

「何？」

「お弁当よ。昨日作るつて言つたじゃない。朝作ったの……」

良かつたー

保健室に居て。

教室だつたら注目の的だぞ……氣絶してしまつ。

だけど、生まれて初めてだ……

女子の手作り弁当。

携帯小説ではよく見たけど……

本当にこんなモノが現実世界に存在するとは……

しかも目の前に……

俺のための……

「本当に作つてきたんだ。」

「私は有言实行な女よ。まあ、食べてみて。」

結構お洒落な弁当箱だ。

「開けていい？」

「もちろん。たくみくんのよ?」

中には、唐揚げ、卵焼、生姜焼きなど大好物がキレイに詰まつていた……

「いただきます。うつ。」

「えつ? もしかしてマズイ? ……」

いや、最高だ…最高にウマイ。

「ウマイ。てか、最高。」

「良かったあ。えつ、もう食べ終わったの？」

「えつ、ダメだった？」

「ダメじやないけど、早いなって…」

「うまかったから。」

「うつむいてしまった…

どうしよう…俺何かしたかな？

「あ、佐々木さん？」

「はい、『めんなさい』嬉しくって…涙でしちゃった。」

案外純粋な子なんだな…泣き顔もかわいい。  
ポケットからハンカチを出す。

「はい。」

「ありがと。ズー」

おい、鼻かむな！

まあ、いつか洗濯すれば。

（家）

今俺は学校から帰つて来て家で筋トレをしている。一応、体格には自身がある。177cm。73キロ。体脂肪9%。

ふあー

疲れた…ちょっと休憩。

## ピンポーン

宅配便か？

「はい。今行きます。」

何か頼んだっけな？

ガチャ

えつ？ 戸を閉める… ガチャ  
これは頼んないぞ。

「ちよつ、ひどいじゃない。閉めるなんて。入れてくれないと叫ん  
じやうわよ？ 助けてーって。」

それだけはやめてくれ… 開けるから

ガチャ

「最初からそうすればいいのよ。お邪魔しまーす。」

そう、佐々木さんだ…

「で、今日は何？ 佐々木さん。」

「はい、ストップーそれダメ。」

「何が？」

「さつき言つた言葉もう一回言つて」

「今日は何？」

「それじゃなくて、その後

「何か言つたけ？」

「もー、私の呼び方。」

「呼び方？」

「だから、その「佐々木さん」よ」

「それをどうしろって？」

「変えて。」

「どこをどう変えるの？」

「はあ…私の事を名前で呼んで欲しいの。「結衣」って。」

「イヤイヤ、無理だよ。誤解を招くって…」

「呼ばないと、たくみくんに言い寄られてるって、学校の人達に言うから。」

薄々気づいてたけど、この子小悪魔？

「わかった。呼べばいいんでしょ。」

だから、根も葉もない事言わないでよ

「それで良い。では、始めから。」

はあ、疲れる…

「でえ、今日は何?ゆつ、結衣」

「よひしぃ。今日泊まるから」

はあ、なにイツテンノコの子?

「今日、親が旅行で私独りなの。泥棒とか入ってきたら怖いなあと  
思つて。

「いいんじょ?」

「はーはー。好きにしてください」

「やつたゞふふ

「俺、風呂入つてくる。へつるこでて」

「はーい

（風呂上がり）

彼女は前に録画して置いた映画を見ている。

「夕飯食べた？」

「えつ？私？気にしなくていいわよ

グウー

「ウソです……お腹ペコペコです」

（俺、失笑。）

「実は俺もまだだから、ピザ取るよ

「本当に？良かつたあ」

「頼んでおくから風呂入つてきなよ

「そうね。よろしくね」

（夕飯後）

「ふう、何か眠たくなつてきちゃつた……私寝るね

「じゃあ、俺のベッド使つて」

「えつ、いいの？たくみくんは？」

「俺、何処でも寝れるから。」

「はーはー。好きにしてください」

「はーはーには何言つても無駄だ…

「じゃあ、お言葉に甘えて。」

「電気消すよ。」

「うん。」

「ねえ、たくみくんって彼女とかいるの？」

「俺に？まさか。いない。」

「じゃあ、好きな子は？」

「んー、わかんない。佐々木さんじゃなくて、結衣は？」

「ひみつ

「はいはい。おやすみ

「おやすみ」

ますますわからぬぞ  
この子の事が…

土曜日の朝。

ふあ。眠い…んつ、目の前に人の顔らしきものが…  
部屋のアイドルのポスターでも剥がれたのかな?  
いや、違う。僕の部屋にそんなものは無い…  
目をこすり焦点を例のモノに合わせる。

佐々木さん? 何で…

寝起きの頭をフル回転させる。

状況がわかつた。

昨日彼女が家に泊まりにきた。  
僕のベッドで寝た。

下で寝ていた僕の目に落ちてきた…といふことか。  
そして、僕はいつたい何時間、目の前の美女の顔と直線距離にして  
10cmの所で向かい合って寝ていたのか…

僕も一応、男の子だぞ。

まあ、寝かせとくか。寝顔かわいいし…

（午前9時）

「おはようつう　ふあ」

彼女が起きてきた。

「お、起きた? ちよつと、朝じはんできたとこだよ。」

「えつ、料理出来るの？たくみくん」

「一人暮らしだよ？それなりには…」

「感心。感心。って、シリアルじゃん（笑）」

「文句あるなら食べなくていいよ？」

「ありませーん。いただきまーす」

「今日どうする？たくみくん行きたい所ある？」

「んー、特に無いな…」

「じゃあ、水族館行かない？」

「水族館かあ、いいかも。」

「じゃあ、決まり。11時出発ね。お風呂借りてもいい？」

「1000円ね。」

「たくみくんの家に無理やり連れ込まれたって、みんなに…」

「はいはい。タダです。」

「よろしい。覗かないでよ」

するわけ無いだろ。後が怖い…

（水族館）

水族館なんていつぶりだろう？

小学校の時に遠足で来た以来かな。それにしても、混んでるな。土曜日だから仕方ないか…

それに、視線もすごいな…

すれ違った人は7割の確率で振り返って見てくる。

僕つてそんなに目立つかな…

違う。となりのあの子だ…

雑誌の表紙にモデルとして写っていても誰も文句を言わない美貌だ。

周りからどう思われるんだろう？カッフルとか？

僕みたいなのがこんな子彼女にできるわけ無いだろ。常識で考えろ  
常識で。

チケットを買って入場する。なんか、ワクワクしてきた。僕つて案

外子供？

だが、となりには近くの小学生に負けず劣らずはしゃいでる高校2年生がいる…

世のかにはこんな子もいるから大丈夫と密かに安心した。

「何？私の顔になんかついてる？」

「別にい」

「何つ？言つて」

「鼻毛が…」

「ウソ？えつ、本当？ちょっと待つて もうやだー」「嘘。」

「サイテー。乙女心を傷つけた代償は大きいわよ」

「ごめん、ごめん。で、いくらくらい？」

「プライスレスよ」

とんでもないものを要求されそつだ…

今は全館観終わって売店にいる。もう体力は無い…彼女はまだはしゃいでる…

「コレ可愛くない？」

「うん。いいんじゃない」

と、ストラップを掲げて見せてきた。正直、早く買い物を終わってほしい。かれこれ30分以上付き合っている…女人の買い物は長いつて聞いたことが、あつたけど本当だ…

「買つてあげるからそろそろ行こうっ！」

「もしかして、もしかしてのプレゼントってやつ？しうがないなあ、受けとつてあげる。」

「はいはい。」

好意を得るためのプレゼントでは無い。僕の体力を気遣つてのプレゼントだ。

「帰り道」

「今日は楽しかったあ  
また来よ！」

「いつかね……」

「もしかして、つまんなかった？」

「いや、楽しかったよ。ただ、クタクタ……」

「体力ないなあ」

「まずい……」

その時僕は気が付いた……

前からDQN達が歩いてくるのを……佐々木さんを観ながら……

## なんだか。この気持ち……

非常まずい…

前から赤い頭、青い頭、黄色い頭……て、信号じやん（笑）  
が歩いてくるのだ。こっちを見てこそりそ笑つてる…

何か企んでる顔だ。

こうこう野ばはどうする…

迷いは無い…

逃げる。

佐々木さんの手を掴み全力で走る。初めて手を握ったかも…

「ちゅ、ちゅうひうなつてるの？」

「いいから。」

彼女は気付いてないらしい。

案の定、追いかけてきた。

おこ、だのコラだの待てだの言ひながら追いかけてくる。  
待てって言われて待つ奴がどこにいる？

「そうこうことね。」

「やつと氣付いてくれた？

「へい、曲がって」

何回か曲がって細い路地に入った。もう、追つて来ないらしい…ふ

う、一安心。

「怪我はない？」

「うん。特に。たくみくんは？」

「僕は平気」

けど、ここはどこだ？夢中で走ったから場所が、わからない。見たこと無い場所だ。

「ここどこかな？」

「いいじゃない。どこでも。ふふ」

何か楽しそうにしてる…

「ちょっと探検しよう。」

「あつ、ああ」

探検つて僕たち迷子だぞ…

「あつ、見てあれ」

「えつ」

彼女が指す先にはお洒落な隠れ家的なカフェがあった。

「入つてみる？」

「うん。入りたいな」

ガシャ

木でできた重い度合いを開ける…すごい…

ドアの中の世界は不思議な国のアリスの世界だ…

「いらっしゃいませ。お一人様ですね？では、いらっしゃへ。」

案内された席はテーブルにロウソクが照らされロマンチックな雰囲気をかもし出していた。

こういう所って、カップルで来る所だよね……多分。

店員さんも僕たちを見ている。

そりやそうだ。目の前にいるのは、超がつく程の美女がいるのだ。この時だけ僕は優越感というものに浸った。だけど、君らが想像しているような関係ではない。

「へえー何か、すゞいカフュ見つけちゃった。」

僕は「コーヒー。佐々木

さんはチーズケーキとガトーショコラを頼んで食べた。もちろん、味は最高。

ふと、目の前の子を見た。

いつ見てもかわいい……よく整った顔…サラサラのロングヘア…

「な、何？」

「いや、良く食べるなあって。

話変わるけど、なんでここに転校して来たの？」

危ない。かわいくて見とれてたなんて口がさけても言えない…

「パパの転勤。」

「へえ。けど、君の家の近くにも高校あるじゃん。何でわざわざ遠いこっちの高校にきたの？」

「秘密よ。ヒミツ ふふ

「はいはい」

秘密の多い子だ。

（成城駅）

店員の人に道を聞いてようやく近くの駅に着いた。

今日はここでお別れだ。

長い一日だった。彼女と会つて一週間も経つていないのに、いろいろな事に巻き込まれてる。だが、そんな日常を楽しんでる自分がいい…

「私、上りだから」

「僕は、下り。じゃあね」

「うん。今日はありがとね。」

駅の改札口を出た所で別れる。

なんだか、この気持ち…

この気持ちを言葉で表現するとなれば

寂しいかな…

「あーっ」

後ろから悲鳴が聞こえた。

まさか、佐々木さんか？

急いで振り返る。

「落としちゃったみたい…

今日水族館で買つてもらつたストラップ…」

「あー、逃げてた時？いいよ。また買つてあげるよ  
でもお、初めてのプレゼン…」

また語尾がフォードアウトして聞こえなかつた。

「初めての何?」「めん、聞こえなかつた

「聞かなくていい」

「い」「ごめん」

何で謝るんだ?僕は…

その日は帰つてすぐ寝た。

起きたら日曜日の午後5時だつた。せっかくの休みを無駄にした感じ…

起きてから家の大掃除をした。何故したかつて?

明日になればわかる。来客があるからだ…超大物の。

はあ、栄養ドリンク飲まなきや。

## めんべつな来客

わざわざから見つめられてる…  
さすがに気になる。

「何がついてる?」  
「えつ、こや、別に…」  
「あつや。瓶が向くべき方向はあつち。黒板だよ」  
「わかつてるわよ。」

わかつてれば良い。こつちは周知出来ない。クラスの中にも薄々僕たちの事を気になつてるやつも居るらしく…

特に特別な関係ではないが。

ただの友達?かな。だよね?

隣からキレイな手が僕のノートに伸びてきた。  
そして「君つて呼ぶのもなし。コイつて呼びなさい」と書いてきた。

無理だろ。学校で…

（昼休み）

あれから相談して、朝学校の外で待ち合わせしてお弁当を渡してもらう事にした。

これならまず、バレる事はないだろつ。

「おー、田中!」飯食べよつぜ  
「オッケー。あれ、佐々木さんは?」

あー、そつと聞かれてればさつきから見当たらなくな。

「トイレじゃない？」

「そつか。けど、なんで最近手作り弁当なんだ？」

「えつ、それはアレだよアレ。

「ほん…あのー…今、流行ってるんだよ。手作り弁当が。男の。

」

「へえ。そうなのか

けど、どこ行つたんだろう？

何で気になつてるんだろう…

～20分後～

佐々木さんが隣にいた。帰つて来たんだ。何か嬉しそうだ。

僕に何か用か？

「何？」

「何つて、私うれしそうでしょ？」

「あー、そうだね…」

「何があつたか聞きたくない？」

聞きたくないと云つたらうそになるが、いじは…

「特に聞きたくない。」

「じゃあ、聞いて。わたし、告白をめちゃつた。高橋君に。」

ああ高橋が…特に疑問はない。

例の美女が転校して来た時、並々ならぬ視線を送っていたからだ。それにルックスも悪い…

「へえ。それで？」

「答え聞きたくないの？」

んー、聞きたいっていつたら聞きたい。聞きたくないっていつたらうそになる…

「うん」

「答えは…断つたわ。」

「えつ、何で？」

「私は軽い女じゃないの。この人つて決めた人じゃないと付き合わないの」

「あー、そつか。」

何だかちょっとびり嬉しかった  
何でだろう?

案の定、昼休み後の高橋は放心状態だった。  
お悔やみ申し上げます。（笑）

「ねえ、今日遊びに行つていい？」

「ごめん、今日は無理。」

「えー、何でー？」

駄々を捏ねるなその歳で。

「無理なものは無理なの」

今日は無理。ただでやめなどされこの上、余計な事を増やさない。

「家へ

今何時だ？二時前か。それからだな……

ピンポーン。

来たか。

ガチャ 鍵を開け、ドアを開ける……

えつ、何で佐々木さんが？

「来ちゃつた」

おこ……ひよつと待て、今口は無理とまつあつ言つたはずだ……

「お邪魔しまーす」

「いやいや、今日は勘弁して本当に無理だから……」

「えー、ひどーい。もしかして、女？」

間違つてはいない……だが彼女じやない。

「やうなんだ！いたの？じゃあ、挨拶しなきゃ。たくみくんとのす」く仲良くなせていただこうありますつい。」「

「もー、そんなんじや無いから……」

遅かった…

「誰?」、「たくみの家でしょ?」

サンゴラスかけた女の人が佐々木さんの後ろに立っている。…そう来る客とはこの人。

「こ」の女ね…私、佐々木結衣と言います。たくみくんとはひとつでも仲良くさせでいただいています」

「あっ。そう。良かつたわね、たくみ。」

もう、お手上げだ…

「もうそんなんじゃないって。姉貴」

「えつ、お、お姉さん?」

「そう。来客はお姉さんだよ。後ろにたつていて、佐々木さんが丁寧に自己紹介してくれた人は僕のお姉さん。まあ、2人とも中入ってよ」

テーブルを挟んで僕、姉貴、佐々木さんと座っている…

もちろん、佐々木さんは固まっている…何故なら僕のお姉さんは、テレビで有名な女優美希だからだ…

撮影などでこっちに来る時はめんどくさいので僕の所に泊まりにする。

だから昨日大掃除したわけ。

「私、たくみの姉の美希よろしくね。」

「私は…」

「さつあ、自己紹介してくれたじゃない。結衣ちゃんね」「はい。私は大ファンなんです。美希さんのー」

「あり、ありがとう ウフ」

「それにしてもあなたにしてはもつたいない子ね。事務所とか入ってる?」

「そんな関係じゃない。」

「ここのは知り合せていただぐ。」

「いえ、入つてないです…」

「あら、本当にじゃあ、今度うちに来てよ、結衣ちゃんの顔なら即採用よ」

「えつ…」

佐々木さんの顔が赤くなつた。照れてる…もちろん、姉貴は冗談で言つたわけではないが…

ブーブー

メールだ。姉貴から?

「私、この子氣に入つた。」

別れちゃダメよ。将来の義理の妹さんなんだから。」

寝言は寝て言え。

しかも、付き合つてない。

「姉貴、疲れてんだろ、早く寝た方がいいよ?そこに布団おいたといだから。佐々木さんも遅くならないうちに帰つた方がいいよ。ね?」

「いいじゃない。私もっと話したいの結衣ちゃん。」  
「泊まりなさい。」

「あ、泊まるわけないだろ、てか、止めてくれ。勝手な事は…

「いいんですか？」

「当たり前じゃない。私が許可してるのよ。今夜は語り明かすわよ

もつだめだ…もつ僕達の兄弟関係にお詫びの方もいると思つが、  
僕は姉には迷惑えな。

「もつ、寝る…」

「はつ？何でベッド入つてるの？」

「だつて、寝るから…」

「私は誰？」

「はあ、お姉さんです」

「お姉さんと言えば？」

「はい。ベッドを使います…」

「じゃあ、何でベッドに入つてるの？」

「暖めときました…」

「わかれば良じ。じゃあ、あつち

「けつあ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7659y/>

---

僕の彼女はあの...

2011年11月30日09時48分発行